百々裏話（16）

おもてあきら

梅枝

謡曲の曲名のつけ方には、いろいろの類型がある。一番多いのは登場する人物の名を曲名にしたもので、きよう演じられる融をはじめ、忠度・夕顔・楊貴妃・盛久・熊坂など、一々あげていてはきりがない。神様の名である白髭・蟻通や、非人格の鷺・鵜・猩々、アダナの山姥・班女・弱法師、あるいは職業や身分で代用されている鵜飼・海士・采女なども、登場人物の名に準じて考えられる。この場合、さすがにシテの名が採用されていることが圧倒的に多いが、白楽天・望月・張良などはワキであり、蟬丸・小督はツレ、昭君・春栄は子方である。葵上だけは実際に舞台に登場しない人物であり、例外に属しよう。定家がそれと似ているが、これは定家葛の略であろうから、ちよつと性質を異にしている。

二番目に多いのは、高砂・邯鄲・大江山・隅田川・安達原・竹生島のように、曲の展開される場所が曲名となつているもので、羅生門・三井寺・咸陽宮・輪蔵などの、建造物の名の場合も同類と言えよう。阿漕・江口・呉羽の類は、人名でもあり地名でもあつて、どちらともきめられない例である。

ついで、曲の中心となつている物に着眼してつけられた曲名がある。羽衣・半蔀・恋重荷・鉢木・砧・土車・花筐などがそれで、作り物や小道具として能の舞台上に持ち出される物である場合が多い。

三笑・七騎落・摂待・和布刈の類は、曲の筋に基づいての曲名であろう。

以上四つの類型が重なり合つた須磨源氏・生田敦盛・大瓶猩々・吉野天人・関寺小町などの類もあるが、これらは主として類似した曲が他に存在する場合である。また鶴亀と月宮殿、俊寛と鬼界島、東北と軒端梅のような同曲異名も、ほぼ右の四つの類型の範囲内でどちらに着眼したかによつて生じているようである。

いずれにせよ、謡曲の曲名は「嵯峨の大念仏の女物狂の物真似」（風姿花伝に見える曲名で、百万のことらしい）のような長い表現がだんだん簡約化されて、便宜のためにつけられたものであろうから、その曲の内容を端的に表現していることが望ましく、前述の類型に属するものはその点大体合格していると言えよう。ところが、梅枝（うめがえ）はどうもおかしな曲名で、この名から梅枝の曲の内容をすぐに想像することは、ほとんど不可能に近い。この曲名の出所は、後段の楽の前の……軒端の梅に鶯の、来鳴くや花の越天楽、謡へや謡へ、梅がえ、梅が枝にこそ鶯は巣をくへ、風吹かばいかにせん花に宿る鶯。

の文句にあるが、ここが別段この曲の眼目と

という場合には相談してきめますね。又謡の中にある言葉などもこの申合せによつてきめておきます。今日のように珍しい小書のある時は皆でじつくり研究しあつてますね」

――それでお稽古は判りましたが当日の上演迄の事話して下さい

「申合せが終つてそれぞれのシテの好みをきいて装束の配色とか小道具とかを考えて装束小道具を揃えます。能の中では、装束の配色が非常に重要ですからね。色一つで役の感じが変つてきます。芝居と違つて作物とか大道具の部類をも当日楽屋で皆で作ります。垣根とか薬屋とか祭壇とか、竹の物を組合せたり、布でくるんだりしてね」

能は古典である、伝統芸術であるといわれる。六百年前に作られたものが忠実に現代の舞台で演ぜられている。完成しているから、いわゆるいわれる所の青写真通り、鵜のみにしてよいのだろうか。生きている以上はその人の生活が芸術以前の生活が舞台ににじみでてこそ能といえよう。又観客も批評家も青写真にひつかからないで、狭いカラを破つて現代の眼で現在生きている場から能をうけとめて始めて能を観たといえるのではなかろうか。この古典の中で、各役のなれあいなどは勿論ない、厳しい各自の力を発揮した一番の曲が、一回の申合せで、上演される。明日の舞台は、今迄と違つた新しい視覚でみられる事であろう。

（写真は当日の申合の舞台を撮す「夕顔」「鉄輪」静夫　三三・九・一一青山にて）

なつているわけでもない。「梅が枝にこそ」以下は、雅楽の越天楽の歌詞の引用で、玄象の中入前にも同文句が引かれており、梅枝独自の詞章ではないのである。結局、梅枝なる曲名は、謡曲の文句の一部に着眼してつけられた曲名と言うことになろうが、同じ類型のものとしては、「飛ぶ雲の光の中に」から出たらしい飛雲と、「ありつる大会」に基づく大会とがある。しかしこの二曲は、多少とも曲の内容をも示しており、梅枝ほど不適当とは思われない。

梅枝が曲の内容とあまり関係の密接でない曲名をもつていることには、同じ典拠に基づいて作られた富士太鼓が影響しているのではなかろうか。富士太鼓と梅枝と、どちらが先にできた曲であるかは、両曲の作者の問題と関連することであるが、まだ定説がない。能勢博士は、梅枝が世阿弥作、富士太鼓が禅竹作とし、梅枝の方が先に作られたと推測しておられるが(謡曲作者考)、この説には種々の無理が含まれており、確実な資料に基づくものでもないので、作者、前後関係ともに、簡単には同意できない。

むしろ、曲名から推して、富士太鼓が先に存在していて、「富士」と「太鼓」と、原話の中核となつている二つの名を占有していたために、後に梅枝が作られた際、適当な曲名が無く、やむをえず梅枝などというひねつた名前を採用した、と考える方が、まだしも可能性が大きいのではなかろうか。両曲の構成からみても、現在能の形式をもつ富士太鼓の方が原話により密着していると思われるし、劇としても優れている。梅枝の方は、杜若などにヒントを得て、同じ題材を、別の趣向で後人が無理に複式夢幻能に仕立て上げたもののように私には思われる。

富士と浅間の争いについて、梅枝の前シテは、自分の夫である富士が管弦の役を賜わつたようにワキに物語るが、富士太鼓では逆に浅間に役を賜わつたことになつており、この点が両曲の筋の上での大きな相違点である。一体この富士、浅間という楽人の名は、富士太鼓に引かれている古き歌「信濃なる浅間の嶽も燃ゆるといへば富士の煙のかひやなからん」に基づいて名付けられたに相違なく、むしろ両曲の典拠となつた説話(はつきりわかつていない)は、実話などではなく、右の歌を中心に組立てられた歌物語であるようにも思われる。それはともかく、右の歌の内容から考えても、浅間が勝ち、富士が負ける富士太鼓の方が自然であり、梅枝のように富士が勝つのでは、富士、浅間と名付けたことが無意味になつてしまう。これなどは、梅枝の作者がボロを出した点とも見るべく、あれこれ考え合わせて、梅枝の方が後世の作に違いないと私は考えている。なお、謡曲で富士が勝つとあるのに、大蔵流の間狂言は富士太鼓のように浅間が勝つように物語る。諸流の謡曲古写本を調べてみたが、大蔵流間狂言と対応するような本文をもつたものは、一つも見当らず、全部富士が役を賜わることになつている。(33・10・1)



理事会開催

一、日　時　昭和三十三年九月五日午後三時

一、議　題

1　諸税問題協議会の結果報告
2　定款変更の必要生じたる件諮問
3　管理者選任の件
4　昭和三十四年度番組編成方針
5　其　他

以　上